



40年史観によせて

千葉工業大学 小澤丈夫

40年史観という見方がある。日本の近代・現代史が40年を区切りとしているというものである。1868年に明治維新による日本の近代化が始まり、およそ40年、1905年日露戦争に勝った。それからちょうど40年、1945年に敗戦によりどん底に落ちる。40年ごとに大きな転換点を迎えていることが妙に気になる。

明治維新は、欧米諸国による植民地化の危機を痛感して、国の近代化によりこれに対抗しようとしたものである。日本が地政学的に有利な位置にあったこと、インドの傭兵の反乱や中国の阿片戦争によって時間を稼げたと同時に、欧米のアジア進出の本質を見破ることができたことなどが幸いしたと言われている。また、幕末の日本は教育の普及や識字率の高さにおいて世界でも最高の域に達していたことや、蘭学により欧州の科学技術がかなりよく理解されていたことも挙げられる。戦国末期、安土桃山時代から徳川時代のはじめにかけて、鉄砲の技術を咀嚼して高性能の鉄砲を輸出していたり（当時の日本の貿易構造は現在の日本のそれによく似ている）、その後輸入された欧州の定時式の時計を不定時制の和時計に改良する（当時の清国や李朝朝鮮では欧州から献上される置時計は単なる飾り物としか見なされなかったという）など、日本固有の特質が力となったことも考えられる。

函館五稜郭に立てこもり、後に電気学会初代会長となった榎本武揚は、当時の“万国公法”を理解しており、外交に通じていたとされる。しかしおおかたの幕府の役人がこれらのことに無知であったことから、不平等条約を押し付けられ、明治政府はその改定に腐心している。富国強兵は、植民地化の危機を脱して後、日本を“一等国”の仲間に入れ、不平等条約を改正させようとする国家目標のためのスローガンであった。これも日露戦争勝利により達せられる。ある見方によれば、それ以後目標を喪失したことが、政府や軍、特に陸軍の退廃に繋がり、ついには無謀な戦争を惹き起して40年後の大敗をもたらす主な原因であると言う。目標喪失による組織の自己目的化の恐ろしさである。

さて、それでは戦後はどうであったろうか。太平洋戦争敗戦からさらに40年後、1985年には何があったのであ

うか。自動車生産台数、輸出台数やGDPの指標を挙げることができよう。また、第2次石油危機を乗り越え、第3次産業の比率が飛躍的に高まり、産業構造の高度化を達成して経済発展を持続させることができた時期に相当する。国民は戦後の駐留米軍を通して米国の市民生活の豊かさを知った。その後問題が残されているにせよ、1人当たりのGDPでは米国を抜き、望んでいた多くの物を手に入れた。しかし、それに続いたのは、1990年代の「失われた10年」である。この間、たとえば銀行員は真面目に地道に土地に金をつぎ込み続けたと言われる。銀行の役割の変化や金あまり現象を察知して新しい構想を立て、目標を創造することができなかったと言う見方は、当たっていよう。いずれにせよ、次の転換点はいつ来るのであろうか。やはり40年後の2025年まで待たなければならないのであろうか。つまりこのまま、さらに25年、ずるずると沈み続けていよいよという苦境まで落ち込まないと改革は起こらないのであろうか。

以上が40年史観の概要である。読者諸君はどのように受け取られたであろう。俗説として無視するには、良くできている。目標設定 → 目標達成 → 目標喪失 → 組織の自己目的化 → 退廃 → どん底 というサイクルがかなり確からしいものとして受け取られるからであろう。しかもそれぞれの局面に40年を要するというのであろうか。



現状を打開する方策として、「創造のための破壊」が言われている。確かに構想力(imagination)を養い、独創性を身に付けることは必須であろう。とすれば、創造を生業としている研究者も真価が問われている。創造はすべてを疑う破壊的な批判精神と強固な自己主張の上に成り立つ。隣百姓、つまり、折り目正しく季節が変わるモンスーン気候の中で、隣の真似をしていれば良いと言われて長い年月無事に暮らしてきた日本人には、つらいことである。しかし、御神輿をワッショイワッショイと担いでいてはどこに行くか分からない。それが1905年から1945年までの出来事である。